

「とにかくやってみる」社風で社外と連携し、多彩な領域に技術力を活かす

精密機械工業の集積地として知られる長野県諏訪地域に本社を構える野村ユニソン株式会社。金属加工や装置開発の技術力が高く評価されるだけでなく、オリジナルワインを製造・販売するなど、幅広い事業展開が特長だ。産学連携や共同開発にも積極的に取り組み、「社外との交流」を活かしたモノづくりが注目されている。

ダイカスト鋳造や精密中空鍛造といった金属加工技術を核として、製造装置の設計・製作も手がける野村ユニソン株式会社は、「洋酒も扱う製造業」として知られる。ガス器具や自動車部品をつくり、半導体や液晶関連の製造機械を開発する傍ら、ウイスキーやブランド、ワインの輸入販売も行う。2008年にはフランス・ロワール地方に自社ワイナリーを取得して、オリジナルワインづくりにも乗り出した。

一方、社外との連携にも積極的だ。05年に開催された「愛・地球博」では、東北大学と共同開発した社交ダンスパートナーロボットを出品して話題となった。20年には、信州大学や地元企業とともに参加する「SUWA小型ロケットプロジェクト」として、諏訪湖でのロケット打ち上げ実験に成功している。

部品加工から始まり、製造装置の設計開発に領域を広げ、やがて最先端技術に挑戦する軌跡からは、モノづくり企業としての一貫した発展性が見て取れる。それだけに、異質な酒類販売事業が際立つ。

「創業社長の祖父が洋酒の輸入販売を始めたとき、誰もが反対したそうです。免許もノウハウもない製造業ですから、それも当然です。でも、いわゆる内外価格差が大きかった当時、海外から直接、洋酒を仕入れることがで

ければ、廉価で販売でき、たくさんの方に喜んでいただけないと祖父は押し切りました。できるかどうかは、やってみなければわかりません。ならば、他人様のお役に立つべく挑戦してみよう、と。その精神は、今も脈々と受け継がれています」

代表取締役社長の野村高城氏は、酒類販売事業への参入の経緯をそう話す。同社では、部品製造の素形材・ユニット事業と製造装置のエンジニアリング事業、そして酒類販売事業の3つが柱となっており、全売上に占める比率も、ほぼ等分に近いバランスで推移しているという。

1954年、野村社長の祖父・千古ちふる氏が創業した同社は、亜鉛合金ダイカストと金型の製造からスタートした。やがて、いち早く確立した精密中空鍛造の技術で低コスト・短納期を実現して競争力を高め、工業用バルブから自動車、家電、食品、医療など、幅広い分野の部品製造を手がけるようになった。

さらに、その過程で培った技術力は製造装置の設計開発にも活かされ、半導体などの専用装置や産業用ロボットでも評価を高めた。

「『とにかくやってみる』のが基本姿勢ですから、お客様から相談があれば、外部の力を借りてでも実現に努めてきました。もちろん、挫折や失敗もあって、事業化に至らなかった案件のほうが多いかもしれませんが



全社員が月に1~2回集まってグループワークを行い、企業理念づくりに取り組んだ



PBDR : Partner Ballroom Dance Robot

産学官共同で開発し、三宅一生事務所がデザインした「社交ダンスパートナーロボット」。2007年度にはグッドデザイン賞を受賞した

ん。しかし、たとえ失敗に終わっても、別の案件につながることもあります。野村ユニソンならやってくれるのではないかと期待感をご縁につながって、自然と事業領域も広がってきたと考えています」

「ご縁」の典型は、同社が原子力エネルギー分野に進出した過程にも現れている。

2010年、東北大学の推薦で、核燃料の再処理工場に同社の機械装置が導入された。東北大学が同社の技術力に着目したのは、前述の愛・地球博がきっかけである。その際、ロボットが話題となった理由の一つは、そのデザインを世界的な服飾デザイナーである三宅一生氏の事務所が担当したことであった。

三宅氏との縁は、2000年、同氏から「マイフリッパー」（現在は終売）の特別注文が舞い込んだことにさかのぼる。マイフリッパーとは、野村社長の父で2代目社長を務めた現会長の稔氏が開発を主導した「履いたまま泳げるサンダル」で、三宅氏はこれをパリコレクションで使用。アイデア商品が10年後、エネルギーという新たな領域での挑戦へとつながったのだ。

全社員で企業理念をつくり自律型人材を育成

こうした信頼関係は、当然ながら、技術力に対する評価が基盤となって成立する。同社では、技術系採用の新入社員は、原則として全員、まず製造現場に配属されるという。そして、事務系も含めたすべての新入社員に「やすりがけ研修」が課せられる。いずれも、モノづくりの基本を体得させるのがねらいである。

「どんな装置を設計するにせよ、後工程を視野に入れてコストや操作性に配慮しなければ、お客様には喜んでいただけません。製造現場を体験すれば、そうした気づきも得やすいはず。自分の手でやすりをかければ、装置の性能や価値が実感としてわかる可能性もあります。製造業の原点は現場にあることを忘れて

はならない、と戒めています。

しかし、自分の希望していた業務内容と違う仕事に就くと、モチベーションが下がってしまう若い社員もいます。だからこそ、トップダウンではなく、社員各々が自律的に考え行動する力を養うことが必要だと考えていました」

大学院で経営工学を学んだ野村社長は07年に入社し、翌年から2年間、大手自動車会社へ出向して「カイゼン」を学んだ。そこでの経験をもとに、同社に戻ってからまず取り組んだのが、企業理念づくりだ。それも、社員自身で考えなければ意味がない。全社員が参加するプロジェクトをリードして、毎月、研修形式で議論を重ね、約1年がかりで完成させたという。以後、企業理念はカードにして全社員に配布され、浸透が図られている。

そして、21年8月に3代目社長に就任した。「事業の領域や規模が拡大すると、マネジメントのあり方にも変化が求められます。ただし、成功企業のセオリーや企業理念をそのまま真似してもうまくいきません。全社員で考え、企業理念をつくった経験は大きな意味がありました。今後も創業以来の挑戦的な姿勢を進化させて、強い組織をつくっていきたくです」



「創業から67年が経ち、第3創業期に入りました。社員が自ら体感し考えられる環境づくりをしたい」と語る野村高城代表取締役社長

取材・文／榎本充伯 写真提供／野村ユニソン株式会社



同社のワイナリーは、自社で栽培したブドウのみを使用。除草剤や化学肥料などを使わず、自然酵母による発酵の自然派ワインだ



Corporate Profile	
代表取締役社長	野村高城
本社	長野県茅野市ちの650番地
創業	1954年
売上高	119億円(2021年5月期)
従業員数	422名(2021年5月末)
http://www.nomura-g.co.jp/	

同社の鍛造工場の様子。本社工場を含む5つの工場を、長野県茅野市と諏訪市に擁している